

## わが国の大学生におけるPerceived Criticismと抑うつ症状および機能障害との関連

著者	成瀬 麻夕, 堀内 聡, 青木 俊太郎, 坂野 雄二
雑誌名	北海道医療大学心理科学部研究紀要 : J Psychol Sci
号	10
ページ	21-26
発行年	2015-03-31
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1145/00010268/">http://id.nii.ac.jp/1145/00010268/</a>

---

 ≪その他≫
 

---

## わが国の大学生における Perceived Criticism と 抑うつ症状および機能障害との関連

成瀬麻夕<sup>1</sup>・堀内 聡<sup>2,3</sup>・青木俊太郎<sup>1</sup>・坂野雄二<sup>3</sup>

### Study of psychological factors associated with perceived criticism in Japanese undergraduate students.

Mayu Naruse<sup>1</sup>, Satoshi Horiuchi<sup>2,3</sup>, Shuntaro Aoki<sup>1</sup>, Yuji Sakano<sup>3</sup>

**要約:** Perceived Criticism (PC) は、重要な他者から受けたと知覚される批判である。PC は、西欧の夫婦や精神疾患に罹患している患者において、抑うつ症状と機能障害に関連することが知られている。また、大学生の抑うつ症状と機能障害は対人関係の影響を受けることが指摘されている。しかし、わが国の大学生において、PC が抑うつ症状と機能障害が関連するかは不明である。本研究の目的は、わが国の大学生において、PC と抑うつ症状と機能障害の関連を検討することであった。分析対象者は、404 名であった。わが国の大学生における重要な他者を検討した結果、多くの大学生が親を重要な他者であると回答した。PC と抑うつ症状および機能障害の関連を検討した結果、PC は抑うつ症状および機能障害と関連することが明らかとなった。以上から、わが国の大学生の PC と抑うつ症状および機能障害の関連が明らかになった。

キーワード：Perceived Criticism, 批判, 大学生, 重要な他者

### はじめに

大学生の抑うつ症状と機能障害は対人関係の影響を受けることが指摘されている (嶋, 1992)。したがって、大学生の生活上の対人関係を良好に保つことが、抑うつ症状および機能障害の改善を促進するために重要であると考えられる。

さて、対人関係の良好度を測定する概念として Perceived Criticism (PC: Hooley & Teasdale,

1989) がある。PC は、個人が重要だと認識している他者 (以下：重要な他者) からの批判をどのように認知しているかを指す概念である (Hooley & Teasdale, 1989)。また、重要な他者とは、ある個人の親、配偶者や恋人などのその個人が大きな影響を受けると想定される人物をさす。PC は抑うつ症状や機能障害とも関連していると指摘されている (Renshaw, 2008)。例えば Kwon, Lee, Lee, & Bifulco (2006) は、うつ病患者を対象とした調査を行い、PC と抑うつ症状との関連を検討した。その結果、両者の間には正の相関 ( $r = .15$ ) が示されている。また、Chambless, Bryan, Aiken, Steketee, & Hooley (2001) では、パニック障害患者、強迫性障害患者を対象に PC と機能障害との関連を検討している。その結果、PC と社会機能障害との間に非常に小さい負の相関 ( $r$

---

1 北海道医療大学心理科学研究科  
Graduate School of Psychological Science, Health Sciences University of Hokkaido  
2 日本学術振興会  
Japan Society for the Promotion of Science  
3 北海道医療大学心理科学部  
Department of psychology, Health Science University of Hokkaido

= -.18) を報告している。このように弱い関連ではあるものの、PCが抑うつ症状と社会機能に関連する要因の1つであることが知られている。

PCは精神疾患を罹患する者のみならず、精神疾患を罹患しない者においても生じる知覚である。大学生を対象にした研究報告では、PCと抑うつ症状との関連性の強さには幅が認められている。例えば、White, Strong, & Chambless (1998) では、PCと抑うつ症状との間に  $r = .17 \sim .27$  という値を報告している。一方、Renshaw, Blais, & Caska (2010) では  $r = .06$  という値を報告している。以上のことから、PCと抑うつ症状との関連の強さは、調査対象者によって異なることが報告されていることが分かる。他方、機能障害について大学生を対象とした検討は行われていない。また、わが国ではPCの概念が浸透しておらず、そのため、わが国におけるPCの研究は皆無である。そこで、本研究ではわが国の大学生のPCと抑うつ症状および機能障害との関連を探索的に検討することを目的とする。

## 方 法

### 1) 研究協力者

地方都市の大学生 686 名に調査用紙を配布した。参加に同意の得られた大学生 471 名を研究協力者とした (回収率 68.66%)。回答に不備のある 61 名と精神疾患に罹患している 6 名を除く 404 名を分析対象とした。このうち、男性が 118 名、女性が 286 名であった。分析対象者の平均 (標準偏差) 年齢は 20.68 (± 2.29) 歳であった。

### 2) 調査材料

#### ① Perceived Criticism Measure (PCM) 日本語版

PCM 日本語版 (成瀬・堀内・坂野, 2014) は、PCとPCに関連する情緒的反応に関する4項目から構成される尺度である。回答にあたって、まず自分にとっての重要な他者を自由記述にて記載する。回答は1から10までの10段階で評価する。わが国の大学生のPCと抑うつ症状および機能障害との関連の検討に先立ち、PCM 日本語版の信

頼性・妥当性を検討したところ、原版PCM (Hooley & Teasdale, 1998) と同程度の信頼性と妥当性が確認されている (成瀬・堀内・坂野, 2014)。本研究では、PCを測定する項目2のみを使用した。本研究では、この項目2をPCM日本語版と便宜上呼ぶこととする。

#### ② Center for Epidemiologic Studies Depression Scale (CES-D) 日本語版 (島・鹿野・北村・浅井, 1985)

CES-D 日本語版は、抑うつ症状を評価する自記式の尺度である。本尺度は、20項目4件法 (0: めったにまたは全くあてはまらない~ 3: たいていまたはいつもある) で構成される。島ら (1985) によって、尺度の信頼性と妥当性が十分に高いことが確認されている。

#### ③ SHEEHAN DISABILITY SCALE (SDISS) 日本語版 (吉田・大坪・土田・和田・上島・福居, 2004)

SDISS 日本語版は、精神的問題に起因する日常生活上の機能障害を測定する自記式の尺度である。SDISSの回答は0から10までの11件法で行う。SDISSの項目は3項目から構成されており、項目1は学業・職業上の機能障害、項目2は余暇活動や家庭外でのコミュニケーションにおける機能障害、項目3は家庭内のコミュニケーションにおける機能障害を測定する。吉田ら (2004) によって、尺度の信頼性と妥当性が十分に高いことが確認されている。

#### ④フェイスシート

年齢、性別、および精神疾患の有無について尋ねた。

### 3) 調査手続き

2013年6月から12月にかけて以下のように調査を実施した。事前に担当教員に了承を得たうえで、講義終了後に教場で調査を実施した。調査に先立ち、調査の手續と目的を説明した。調査への参加に同意した学生に対して調査用紙を配布し、回答終了後に回収した。調査を実施した講義の一部では、クレジットシステムを採用した。

4) 倫理的配慮

本研究は、著者が所属する機関の倫理委員会の承認を得て実施された。

5) 統計解析

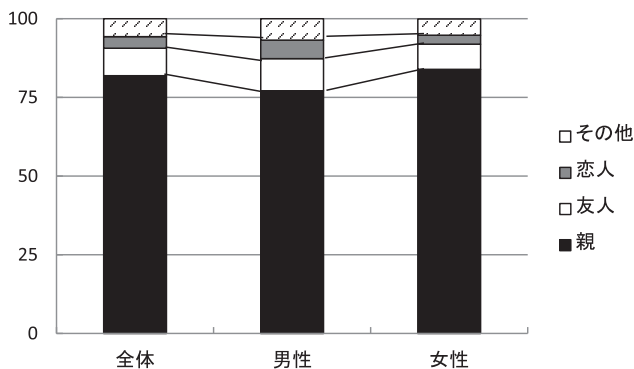
統計解析には SPSS 20.0 を使用した。

結 果

1) 記載された重要な他者

回答者が記載した重要な他者は、親、友人、恋人、その他に分類された。全体と男女別の回答割合を図 1 に示す。

重要な他者の選択に性差があるかを検討するためカイ 2 乗検定を行った。その結果、有意な差は認められなかった ( $\chi^2(3) = 3.46, n.s.$ )。



Note: 人数の割合に性差は見られなかった

図 1 回答者が選択した重要な他者の割合

2) PC と抑うつ症状および機能障害との関連

PC と抑うつ症状および機能障害との関連を検討するにあたり、各変数の得点に男女差があるかを検討するために t 検定を行った。その結果、CES-D の得点に男女差がみられた ( $t(401) = -2.33, p < .05$ )。したがって、以下の分析においても全体と男女別に結果を記載する。

PC に抑うつ症状と機能障害が関連しているかを検討するため、研究協力者全体における PCM 日本語版得点と CES-D および SDISS の得点のピアソンの積率相関係数を算出した (表 1)。その結果、PC と CES-D との間、PC と SDISS と

の間、CES-D と SDISS の間に、それぞれ正の相関が認められた。

表 1 研究協力者全体における各尺度の相関係数と平均値および標準偏差 (N=404)

(N=404)	1	2	3
1.PCM		.36**	.22**
2.CES-D			.35**
3.SDISS			
Mean	3.58	16.87	7.87
SD	2.15	10.59	7.57

Note: CES-D = Center for Epidemiologic Studies Depression scale  
 PCM = Perceived Criticism Measure  
 SDISS = SHEEHAN DISABILITY SCALE  
 SD = Standard Deviation  
 \*\* $p < .01$

男性の PC に抑うつ症状と機能障害が関連しているかを検討するため、男性における PCM 日本語版得点と CES-D および SDISS の得点の相関係数を算出した (表 2)。その結果、PC と CES-D との間、PC と SDISS との間、CES-D と SDISS の間に、それぞれ正の相関が認められた。

表 2 男性の研究協力者における各尺度の相関係数と平均値および標準偏差 (N=118)

(N=118)	1	2	3
1.PCM		.36**	.25**
2.CES-D			.32**
3.SDISS			
Mean	3.74	14.96	8.78
SD	2.11	10.17	7.90

Note: CES-D = Center for Epidemiologic Studies Depression scale  
 PCM = Perceived Criticism Measure  
 SDISS = SHEEHAN DISABILITY SCALE  
 SD = Standard Deviation  
 \*\* $p < .01$

女性の PC に抑うつ症状と機能障害が関連しているかを検討するため、女性における PCM 日本語版得点と CES-D および SDISS の得点の相関係数を算出した (表 3)。その結果、PC と

CES-D との間、PC と SDISS との間、CES-D と SDISS の間にそれぞれ正の相関が認められた。

表 3 女性の研究協力者における各尺度の相関係数と平均値および標準偏差 (N=286)

(N=286)	1	2	3
1.PCM		.37**	.20**
2.CES-D			.37**
3.SDISS			
Mean	3.51	17.65	7.50
SD	2.17	10.67	7.41

Note: CES-D = Center for Epidemiologic Studies Depression scale  
 PCM = Perceived Criticism Measure  
 SDISS = SHEEHAN DISABILITY SCALE  
 SD = Standard Deviation  
 \*\* $p < .01$

## 考 察

本研究の目的はわが国の大学生の PC と抑うつ症状および機能障害との関連を検討することであった。回答者が記載した重要な他者は、親が最も多いという結果となった。続いて、友人、恋人、その他（従姉妹・兄弟など）の順で多く、大学生における重要な他者の選択に性差は認められなかった。先行研究によれば、米国の大学生が選択する重要な他者の割合は親が約 5 割、友人が約 2 割、恋人が約 3 割であることが報告されている (Renshaw, McKnight, Caska & Blais, 2010)。この結果は、本研究の結果と一致する部分と、異なる部分がある。わが国の大学生も米国の大学生も重要な他者として親を選択する割合が一番多い点は共通している。しかし、わが国の大学生の約 8 割が親を選択しており、選択する人数の割合が米国での報告と異なっている。重要な他者を選択する割合の違いは、わが国と米国の文化差が関連している可能性が考えられる。米国は、青年期に自立することが好ましい文化であり、大学生では家族以外との関係性を築くことをわが国よりも促進されている可能性が考えられる。一方、わが国の大学生は自立心が低いことが指摘されており（高

田・松本, 1995）、親からの自立が米国と比較して遅れている可能性が考えられる。このような文化的な背景により、重要な他者の選択の割合の違いが生じた可能性が考えられる。

本研究では、わが国の大学生の PC と抑うつ症状および機能障害との関連を検討した。本研究の結果から、抑うつ症状が強い大学生ほど PC を強く認識していることが明らかになった。先行研究では、うつ病の患者を対象とした調査を行い、PC と抑うつ症状の間に非常に弱いから弱い正の相関 ( $r = .02 \sim .15$ ) が報告されている (Hooley & Teasdale, 1989; Kwon et al., 2006)。本研究の結果では先行研究よりもやや高い値が得られた ( $r = .36 \sim .37$ )。この違いは、欧米とわが国の文化の違いによると考えられる。Reischauer (1988) は、日本では集団主義の傾向が強く、米国では個人主義の傾向が強いことを指摘している。集団主義の文化では、個人主義の文化に比べて、周囲の他者からの影響を受けやすいことが指摘されている (Reischauer, 1988)。周囲からの影響を強く受けることによって、わが国の大学生の PC が抑うつに強く影響している可能性が考えられる。したがって、わが国の大学生は米国の大学生と比較して PC と抑うつ症状の関連が強くなったと考えられる。今後はうつ病患者だけではなく、わが国の大学生においても PC に影響する要因の一つとして、抑うつ症状を考慮する必要があると考えられる。

次に、わが国の大学生において機能障害の程度の高さと PC の認識の強さの間に正の相関があることが明らかになった。パニック障害、強迫性障害を対象に、The Global Assessment of Functioning (American Psychiatric Association, 2000) によって測定された機能障害と PC との関連を示した研究では、非常に弱い負の相関 ( $r = -.10$ ) が報告されている (Riso, Klein, Anderson, Ouimette & Lizardi, 1996)。大学生を対象にした本研究の結果でも先行研究と同様に PC と機能障害が関連していることが明らかとなった。このことから、関連性の程度は弱いものの、今後はパ



ニック障害患者や強迫性障害患者だけではなく、大学生においてもPCに影響する要因の一つとして、機能障害を考慮する必要があると考えられる。

また、抑うつ症状の強さと機能障害の程度の高さには正の相関があることが明らかになった。抑うつ症状と機能障害の関連を報告した河村(2004)の研究では、 $r = .42$ という中程度の正の相関が示されている。河村(2004)の研究で使用された質問用紙には、抑うつ症状を測定する項目の中に希死念慮の項目が含まれ、機能障害とより強い関連を示したため、本研究の相関の強さに違いが出たと考えられる。

これまでの先行研究では、主に臨床群の参加者を対象として、配偶者や恋人などから感じている批判が検討されてきた。しかしながら、わが国の大学生を対象とした本研究では、親との関係性に関する回答が大多数を占めることが明らかになった。さらに、わが国の大学生において、米国と同様に友人や恋人を重要な他者であると認識している者も存在することが明らかとなった。White et al. (1998)の研究では、選択する重要な他者の違いによってPCと心理的要因の関連に違いがあることを報告している。以上のことから、今後はわが国の大学生を対象に、重要な他者との関係性の質的な違いがPCに与える影響について検討していく必要性が考えられる。

## 引用文献

- American Psychiatric Association. (2000). *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders. Fourth Edition-Text Revision (DSM-IV-TR)*. Washington, D C: American Psychiatric Association.  
(高橋三郎・大野 裕・染矢俊幸 (訳) (2002) . *DSM-IV-TR 精神疾患の診断・統計マニュアル* 医学書院).
- Chambless, D. L., Bryan, A. D., Aiken, L. S., Steketee, G., & Hooley, J. M. (2001). Predicting expressed emotion: A study with families of obsessive-compulsive and agoraphobic outpatients. *Journal of Family Psychology, 15*, 225-240.
- Hooley, J. M., & Teasdale, J. D. (1989). Predictors of relapse in unipolar depressives: Expressed emotion, marital distress, and perceived criticism. *Journal of Abnormal Psychology, 98*, 229-235.
- 河村壮一郎 (2004). 精神健康調査票を用いた短期大学生の精神的健康に関わる要因の検討 *鳥取短期大学研究紀要, 50*, 17-25.
- Kwon, J. H., Lee, Y., Lee, M. S., & Bifulco, A. (2006). Perceived criticism, marital interaction and relapse in unipolar depression - Findings from a Korean sample. *Clinical Psychology & Psychotherapy, 13*, 306-312.
- 成瀬 麻夕・堀内 聡・坂野 雄二 (2014). Perceived Criticism Measure 日本語版の信頼性と妥当性の検討 第14回日本認知療法学会・第18回日本摂食障害学会学術集会合同大会プログラム・抄録集, 131.  
(Naruse, M., Horiuchi, S., & Sakano, Y.)
- Reischauer, E. O. (1988). *The Japanese today: Change and continuity*. Harvard University Press, Cambridge.  
(福島正光 (訳) (1990) *ザ・ジャパニーズ・トゥデイ* 文藝春秋).
- Renshaw, K. D. (2008). The predictive, convergent, and discriminant validity of perceived criticism: A review. *Clinical Psychology Review, 28*, 521-534.
- Renshaw, K. D., Blais, R. K., & Caska, C. M. (2010). Distinction between hostile and nonhostile forms of perceived criticism from others. *Behavior Therapy, 41*, 364-374.
- Renshaw, K. D., McKnight, P., Caska, C. M., & Blais, R. K. (2010). The utility of the relationship assessment scale in multiple

types of relationships. *Journal of Social and Personal Relationships*, 28, 435-447.

Riso, L. P., Klein, D. N., Anderson, R. L., Ouimette, P. C., & Lizardi, H. (1996). Convergent and discriminant validity of perceived criticism from spouse and family members. *Behavior Therapy*, 27, 129-137.

嶋 信宏 (1991). 大学生のソーシャルサポートネットワークの測定に関する一研究 教育心理学研究, 39, 440-447.

(Shima, N.)

島 悟・鹿野達男・北村俊則・浅井昌弘 (1985). 新しい抑うつ性自己評価尺度について 精神医学, 27, 717-723.

(Shima, S., Shikano, T. Kitamura, T., & Asai, M)

高田利武・松本芳之 (1995). 日本的自己の構造 - 下位様態と世代差 心理学研究, 66, 173-178.

(Takada, T., Matsumoto, Y)

White, J. D., Strong, J. E., & Chambless, D. L. (1998). Validity of the perceived criticism measure in an undergraduate sample. *Psychological Reports*, 83, 83-97.

横山勝英 (2003). 地域差の比較研究 龍谷大学経済学論文, 43, 107-123.

(Yokoyama, K.)

吉田卓史・大坪天平・土田英人・和田良久・上島国利・福居顯二 (2004). Sheehan Disability Scale (SDISS) 日本語版の作成と信頼性及び妥当性の検討 臨床精神薬理, 7, 1645-1653.

(Yoshida, T., Otsubo, T., Tsuchida, H., Wada, Y., Kamijima, K., & Fukui, K.)